

御所まち

伝建通信

第8回

大和棟
やまとむね

文化財課 画 60・1608

御所まちの町家には、大和棟と離れ座敷という2つの大きな特徴があります。今回は大和棟について紹介します。

大和棟とは、瓦葺の屋根の上に急勾配の茅葺の屋根を載せた形式のことで、奈良盆地を中心に大阪や三重の範囲に存在します。御所まちでも最も古い本町の赤塚家（1700年代中頃）も



大和棟（高塀造り）の町家・赤塚家（本町）
※現在、茅葺屋根は銅板で覆われています。

（注）「ツシ（厨子）2階建て」：天井の低い2階部分がある造りのこと

大和棟の町家です。実は江戸時代末期（1830年頃）までに

建てられた町家のほとんどは、元々茅葺の大和棟であり、大正

時代頃にツシ2階建て（注）の瓦葺に改造されたようです。

大和棟は、建築史では江戸時代の富裕農家特有の形式として

広く知られていますが、なぜ御所まちのような町場に大和棟の町家が並んでいたのでしょうか。

大和棟の茅葺屋根の両端には、屋根より高くなった妻壁があり、その上には瓦がずらりと並んでいます。この部分はいわゆる「うだつ」が上がらない（出せできない）の由来である卯建にあたり



南中町の中井家も元は大和棟
※現在はツシ2階建て・瓦葺

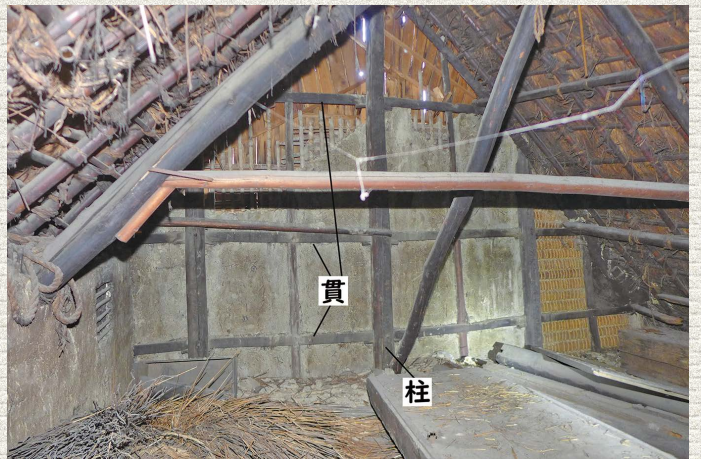
①大和棟の天井

御所まちの大和棟は板天井を支える太い丸太があり、この天井があれば、元大和棟の可能性がります。



ますが、この卯建の上がつた建物を奈良盆地では「高塀」と呼んでいました。大和棟は大正時代にできた用語であり、それまでは高塀造りという呼称が一般的でした。

この高塀造りのルーツは京都にあると考えられます。1400年代中頃、京都の酒屋や金融業を営む有力商人は、「高壁」と呼ぶ町家に住んでいました。高壁とは、高塀と同じ卯建のある壁のことで、屋敷の警備や防火の役割を果たしていました。応仁の乱（1467年）が発生すると、京都に暮らす多くの貴族や商人



②大和棟の屋根裏（茅葺）

貫（ぬき）と呼ばれる材木を柱に対して垂直に通し、壁を固定します。上には茅葺の屋根を載せています。防火のため床板には土を盛っています。このような屋根組は重量があるため、①のような太い丸太が使われました。

たちが、避難のため奈良に移住しました。おそらく、移住した人たちによって、高壁の形式が奈良にもたらされたので、高塀と呼ばれるようになったのでしよう。奈良の住民の中にも高塀造りは裕福な商人の屋敷という認識があったので、商人が多く暮らす御所まちにも高塀造りの町家が並ぶようになったと推測できます。その後、奈良の立派な高塀造りの屋敷構えに影響を受けた豪農たちが、自分たちの家にも高塀造りを取り入れたと考えられます。

以前、御所まちの町割りや背割下水は大阪のまちづくりプランが採用されたと説明しましたが、町家については京都の文化の影響が強かったようです。

